

自然観と国際環境政策

——日米国立公園の比較を通して——

信 夫 隆 司*

要 旨 日米両国の国立公園制度の違いを明らかにし、国立公園における米国人ならびに日本人の行動パターンを比較した。この分析を通して、日米両国民の自然観の違いを明らかにした。その上で、京都議定書の結果に、自然観の違いがどのように影響しているかを明らかにした。自然は管理されるものであるとする米国人の自然観、自然と人間との曖昧な一体感を示す日本人の自然観、これらが京都議定書に対する両国の態度を決定するひとつの要因になっていることが論証された。

キーワード 国立公園 自然観 国際環境政策 地球温暖化 京都議定書

1 問題提起と構成

1997年12月に採択された京都議定書は、地球温暖化問題に対処するための具体的な一步を記したと言われる。周知のように、交渉は最後の最後まで難航し、交渉期限の12月10日を過ぎてもまとまらず、11日に同議定書が採択されるという異例の事態となった。こうした背景には、米国ならびに日本がきびしい内容の議定書に最後まで抵抗したことがある。その理由として、両国が温室効果ガス、とりわけ二酸化炭素の大量排出に依存した社会を造り上げてきて、その転換を図るのは容易でないことが挙げられる¹⁾。しかし、それだけなのだろうか。

筆者は1999年9月から10月初めにかけて、米国内の主に中西部地域に展開する18の国立公園を視察する機会を得た。そこで得られた知見から、地球環境問題をめぐる各国の外交政策といったものも、それぞれの自然観の影響を受けているのではないかという印象を持った。もちろん、自然観から直ちに国際的な環境政策が導かれるといった単純な仮説を提示しようとは思っていない。しかし、自然観も国際環境政策形成の要因のひとつに挙げ

られるのではないかと。

米国には、現在、54の国立公園がある。国立公園は言うまでもなく自然の宝庫であり、自然環境を保護する上において米国でももっとも重要な地域と考えられている。したがって、国立公園のあり方、あるいはそこにおける人々の行動パターンを観察することによって、米国人の自然観というものをもっとも端的に理解できるのではないかと思われる。

米国人の自然のとらえ方、管理の仕方とわが国のそれとは大きな違いがあるように思われる。それは単に米国の雄大な自然とかたぐいまれなる自然の造形といった自然の持つ物理的存在だけでなく、その価値観とか利用といった点においてわが国とは大きく異なっているのではないだろうか。本来、人と自然とは切り離せない、という前提が日本の自然観にはある。日本人の考える神は、山、川、草、木とありとあらゆるところに宿っている。古来より人間と自然とは一体であり、また自然は人間の悪い行いに罰を与える恐れ多い存在であった。それは、たとえば大樹がご神木として祭られたり、あるいは奇岩や山頂に祠が置かれたりすることに如実に現れている。

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子

翻って米国人の自然のとらえ方はどうであろうか。米国人の場合、自然に対置するものとして人間を想定しているように思われる。日本人の場合には自然に対置するのは人間ではなく、人工である²⁾。つまり、自然と人間は一体であり、ただ人間が作り出したものとしての人工が自然と対置されている。米国人の場合には何となく自然を「もの」として、人間から一步距離をおいたものとしてとらえているように思われる。

たとえば、米国でももっとも有名な国立公園のひとつであるイエローストーン国立公園を訪れた際に奇妙な印象を受けた。米国人がじっと温泉がわき出ているところを見ているところに遭遇したときである。もちろん、まわりに温泉宿などあるはずもなく、ただ、温泉の湯気が出ていたり、ぼこぼこと温泉が湧きだしているのを米国人は黙って見ているだけであった。その時、私は何故米国人は温泉がただ湧いているのを見ているのだろうかという素朴な疑問を感じた。日本人ならばすぐにこれは絶好の露天風呂だなどと考えてしまうだろう。もちろん、これは一例にしか過ぎない。しかし、国立公園の管理全般、整備のあり方、レンジャーの仕事、国立公園を訪れる人々の行動パターン等を観察することによって、米国人と日本人の自然観を浮き彫りにすることができるのではないかと思えるようになった。

日米の国立公園はその制度からして根本的に異なる。米国の国立公園をひとつの理想とする考えもある。もちろん、米国の国立公園制度から学ぶべき点は多い。しかし、さらに突き詰めていくと、米国の国立公園制度を日本にそのまま移入しただけでは解決しない(あるいは、もともと制度的に移入できない)、両国民の自然観あるいは自然観と一体となった文化の違いがあるのではないかとも思われる。それは米国の国立公園の調査以後に行われた屋久島の自然環境の調査を通してますます実感するようになった。そして、日米の政策決定者もそれぞれの自然観の下で育ってきたわけであり、国際社会における日米の環境政策にも何らかの影響を及ぼしているのではないかと考

えるようになった。とするならば、米国人ならびに日本人の自然観を明らかにしていくことも、国際環境政策を理解する上においてあながち無視できないことなのかもしれない。そこに、米国人ならびに日本人の自然観を探究する国際環境政策上の意義があると思われる。米国における環境保護運動はわが国などに較べ、活発であると思われるにも係わらず、地球環境問題、とりわけ地球温暖化を防止しようとする取組にはきわめて消極的である。自然との一体感を持ち、自然との調和を心がけてきた日本人も、同じく地球温暖化の対応においては消極的であった。このことをとらえる新たな視点として、米国人ならびに日本人の自然観にアプローチしてみたいというのが本稿執筆の動機である。

本稿は、次のように構成される。第2節では、まず日米両国の国立公園の概要を説明し、日米の国立公園制度の違いについて論ずることにする。もともと米国の国立公園は公営造物(国が土地を所有)としてスタートしたのに対して、日本の国立公園はいわゆる地域制(土地の所有者が誰かを問わず、国立公園として地域を指定する)をとっており、国立公園がすべて国有というわけではない。また、国有であっても管理権が一元化されていない。この制度の根本的な違いが国立公園の管理・運営にさまざまな違いを生み出している。ただ、それだけでなく、おそらく米国人と日本人の自然観の違いも制度の違いに反映されているように思われる。したがって、そういった点にも言及していく。第3節では、米国人と日本人の国立公園における行動パターンの違いを浮き彫りにしたい。これはある意味ではより直接的に米国人ならびに日本人の自然観がにじみ出ているのではないかと思われる。第4節では、日米両国における自然観の違いを明確にすると同時に、これらの違いが米国ならびに日本の環境政策にどのような意味を有しているのかについて言及していく。

2 日米国立公園の比較

2-1 国立公園の概要

米国のイエローストーン国立公園は1872年（明治5年）に世界で初めて誕生した国立公園である。その後、米国における自然環境保護の父といわれるジョン・ミューアの功績によって、1890年にはヨセミテやセコイアといった米国を代表する国立公園が誕生していった。ミューアはイギリスからの移民として米国にやってきて、シエラネバダ山脈の自然景観の美しさにみせられ、そこを国立公園として保護する運動を推し進め、ついにはヨセミテ国立公園が誕生した³⁾。ミューアの精神は、シエラ・クラブという全米でも屈指の自然保護団体に受け継がれている。現在、米国の国立公園は54を数える。これを米国の地域別に見ていくと次のようになる。東部11、南西部3、ロッキー山脈7、グランド・サークル10、西部11、ハワイ・サモア他の島々4、アラスカ8である⁴⁾。アラスカと島嶼を除いた米国本土には42の国立公園がある。その内、28が西部ならびにロッキー山脈やグランド・サークルといった山岳地域に位置している。米国の国立公園の対象地域は原始的大自然がほとんどである⁵⁾。メサベルデ国立公園のように、アサジと呼ばれる先住民族の断崖住居が指定されるのは例外である。因みに、このメサベルデ国立公園は世界遺産としても登録されており、文化遺産となっている。

わが国では、1931年に国立公園法が制定された。同法の目的は、美しい自然景観や地形、貴重な動植物の保護と国民の保健・休養の場の確保等である。1934年から1936年にかけて12の国立公園が指定された。これを大きく二つに分類すると、ひとつは既存の観光地、たとえば日光や富士箱根等がある。もうひとつは、原始的な自然環境を保護するために指定されたもので、北海道の大雪山や北アルプスを中心とした中部山岳地域等がある。今日、わが国における国立公園は28を数える⁶⁾。

2-2 制度上の違い

米国の国立公園はそのほとんどが国有地である。ただし、100%国有地というわけではない。たとえば、イエローストーン国立公園のすぐ南にあり、氷河がおりなす山岳景観で有名なグランドティトン国立公園内には今でも私有地がある。そのような例外を除いては国有地である。ここで米国の国立公園システムを概観しておこう。米国の国立公園システムには、国立公園以外にもさまざまな名称の行政区画が存在する（詳しくは、表1参照）。中には南北戦争の戦場といったようにわが国で言えば文化財や史跡といったものも含まれている。そこで、わが国の自然公園法に準じた形の公園（国立公園、国定公園）として、国立公園と国家保存物（National Monuments）を中心に見ていくことにしよう⁷⁾。

米国の国立公園はすでに述べたようにイエローストーンが最初である。このイエローストーン国立公園は、いわゆるイエローストーン法という法律によって創設された⁸⁾。そこには、ナイアガラの滝における苦い経験があったといわれる。ナイアガラの滝の場合には東部に位置し、商業的観光化が進んでしまっていた。ナイアガラの滝では地元の土地所有者がいわば金儲けのため、フェンスを設けたり、観光客から滝壺をのぞくための料金をとっていた。また、安っぽいみやげ物、ごみ、きたならしさといったことがアメリカ東部のもっとも崇高な地域に満ちあふれることになった。政府もこういったすばらしい自然は誰もが利用できるようにしなければならないと考えていた⁹⁾。

イエローストーン国立公園が制定された当時の米国の土地制度を説明しておこう。米国では、1776年の独立後、アレゲニ山脈以西の土地は、連邦政府の所有地とされていた。そして、ルイジアナ買収やメキシコ戦争の結果として取得された領土も付け加えられていった。この連邦所有地は公有地（public land）と呼ばれている。西部の土地のほとんどは一度は公有地であった。その後、公有地の売却が進められ、1862年には、5年間、

表1 米国の国立公園システム (1998年11月現在)

国立公園システムの内訳	数
国際的史跡地 (International Historic Site)	1
国設戦跡地 (National Battlefields)	11
国設戦史跡公園 (National Battlefield Parks)	3
国設戦跡地域 (National Battlefield Site)	1
国設史跡地 (National Historic Sites)	77
国設史跡公園 (National Historical Parks)	38
国設湖畔地区 (National Lakeshores)	4
国設記念物 (National Memorials)	28
国設軍事公園 (National Military Parks)	9
国家保存物 (National Monuments)	73
国立公園 (National Parks)	54
国設公園道路 (National Parkways)	4
国設自然保護区 (National Preserves)	16
国設レクリエーション地域 (National Recreations Areas)	19
国設保護区 (National Reserve)	2
国家河川 (National Rivers)	6
国設風致長距離歩道 (National Scenic Trails)	3
国設湖畔地区 (National Seashores)	10
国家野生・風致河川 (National Wild and Scenic Rivers)	9
公園その他 (Parks-other)	11
合 計	379

出典：http://www.nps.gov/legacy/nomenclature.html

(注) ただし、国立公園局が示している数字については若干疑問が残る。

表で示された数字と内訳で示された数字が一致しない場合もみられ、合計も表では378となっている。

開墾に従事した者に対して、160エーカー（約2万坪）の土地を無償で与えるというホームステッド法が成立した。これは小農民に対してとられた措置であった。これとは別に資金があればいくらでも公有地を購入できる状況にあった¹⁰⁾。そこで、手つかずの自然が残されている西部においては、ナイアガラの滝を教訓として、いち早く公有地を国立公園とし、原生自然を保護しようとしたのであった。

しかし、国立公園が法律によって創設されるということは、議会の意向によって国立公園の誕生が左右されることを意味する。ある地域が国立公園になれば、狩猟、鉱物の採掘、破壊活動は許されなくなる。たとえば、ヨセミテ国立公園創設法案が連邦議会に提出された際には、国立公園の創設によって打撃をこうむる製材会社、それと利害が一致する資本家や政治家が猛烈な反対運動を行ったという¹¹⁾。

わが国の場合、国レベルの公園としては国立公園と国定公園がある。国立公園として、「わが国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地」が指定される（自然公園法2条1項）。国定公園として、「国立公園に準ずるすぐれた自然の風景地」が指定される（自然公園法2条2項）。これは土地所有の形態に関係なく指定される。いわゆる地域制という方法がとられている¹²⁾。イギリス等もこの方法をとっている。国土が比較的狭く、地域の土地利用が古くから進み、また所有権関係も複雑な場合に用いられる¹³⁾。国立・国定という言葉それ自体からは両者の違いは明確でない。英語で国定公園は Quasi National Park と表記されており、「国立公園に準ずる」という意味が明確に伝わってくる。国立・国定公園とも、環境庁長官が、自然環境保全審議会の意見を聞いて、区域を定めて指定することになっている。両者の違いは、国定公園の指定が、関係都道府県の申し出

により行われるという点である（自然公園法10条1項・2項）。このように、わが国の場合、国立・国定公園は環境庁長官の指定によって創設されるので、国会が直接関与することはない。

2-3 公園内の管理の違い

(1) 管理全般

米国の国立公園の場合、公園の管理者は内務省国立公園局である。入り口のゲートから公園内のビレッジ、道路、橋、トイレといった施設、原生自然、利用者が原生自然に入る場合の許可等に至るまで、あらゆる事項を一元的に管理している。これに対して、わが国の国立公園の場合には、地域性がとられていることもあって、管理はそれぞれの管理権を有するところが管理する。たとえば、国有林であれば林野庁が管理し、国道であれば建設省が管理し、私有地であればそれぞれの土地所有者が管理する。自然公園法では、17条で風致を維持するため公園計画に基づいて「特別地域」を環境庁長官が指定できるとしている。その地域内では特定の行為が制限され、許可制となっている。ただし、国の機関が行う行為については、この許可制の例外となっている（自然公園法40条）。ということは他官庁が権限を有する土地については、その同意なく指定できないことになっている。このようにわが国の場合、環境庁による国立公園の管理はもともと限定されている¹⁴⁾。

(2) 入り口と道路

【ゲート】米国の国立公園は国有であることから、国立公園の管理の仕方においても大きな違いが出てくる。ここではまず、ゲートの有無から見ていくことにしよう。米国の場合、国立公園はそのほとんどが国有地になっていることから、国立公園に入るということは、感覚的には他の公営造物、たとえば国立の美術館とか競技場に入るのと同じである。その公営造物が無料で開放されていない限り、通常、入場料が必要になる。米国の国立公園に入るには、道路を経て入る方法しかまず

無いので、国立公園の入り口にはゲートが設けられている。ただし、すべての国立公園にゲートが設けられているわけではない。たとえば、ノース・カスケード国立公園の場合にはまったくゲートは設けられていない。また、イエローストーンのように入場者が多い国立公園の場合にはゲートでのチェックが厳しいように思われた。どのように厳しいのかは入場料との関連で後述する。ゲートに関連して、国立公園への道順、あるいは国立公園に入ったかどうかはすべて掲示板で記されており、非常に明瞭である。フリーウェーあるいは一般道において、国立公園を含む国立公園局が管理する営造物を示すサインは茶色に統一されており、まず迷う心配はない¹⁵⁾。

【入場料】米国の国立公園では多くの場合入場料を必要とする。その額は、国立公園によって若干の違いがあるが、1998年現在で、車一台につき10ドル、徒歩や自転車の場合には一人につき5ドルのところが多い。車一台につき4ドルとか5ドルのところもある。ただし、グランドキャニオン、グランドティトン、イエローストーン、ヨセミテといった人気の高い国立公園の入場料は、車一台につき20ドル、車以外では一人につき10ドルとなっている¹⁶⁾。また、何度も国立公園を利用する人、年齢62歳以上の人、障害者の人のために、ゴールデン・パスポート・プログラムが用意されている。まず、ゴールデン・イーグル・パスポートは、50ドルで1年間有効であり、国立公園を含むその他の公園に自由に出入りできる。ゴールデン・エイジ・パスポートは、62歳以上の人々が10ドルで購入でき、生涯有効である。また、障害者のためには、ゴールデン・アクセス・パスポートが用意されており、生涯、無料で国立公園等を利用できる。ゴールデン・イーグル・パスポートは外国人も購入することができる。ゲートでこのパスポートをレンジャーに見せればよい。本人かどうかを確認するため、パスポート等の身分証明書の提示を求められる場合がある。ただし、私が知る限り、パスポートの提示を求められたのはイエローストーン国立公園だけであった。

表2 利用者数の多い国立公園の日米比較(上位10公園)

順位	公 園 名	利用者数	公 園 名	利用者数
1	富士箱根伊豆	102,059,000	グレートスモーキー山脈	9,989,395
2	瀬戸内海	41,038,000	グランドキャニオン	4,239,682
3	上信越高原	34,684,000	ヨセミテ	3,657,132
4	日光	23,847,000	オリンピック	3,577,007
5	阿蘇くじゅう	22,988,000	イエローストーン	3,120,830
6	支笏洞爺	15,074,000	ロッキーマウンテン	3,035,422
7	秩父多摩	13,789,000	グランドティトン	2,757,060
8	磐梯朝日	13,585,000	アケーディア	2,594,497
9	中部山岳	13,131,000	ザイオン	2,370,048
10	霧島屋久	12,985,000	マンモスケーヴ	2,113,992

出典：日本の場合は、環境庁自然保護局自然ふれあい推進室「平成9年自然公園の利用者数」『国立公園』572号(1999年4月)、37頁、表-2による。米国の利用者数は、
<http://www2.nature.nps.gov/stats/>を参照した。
 (注)日本の資料は1997年、米国の資料は1998年である。

ゲートでは入場料あるいは各種パスポートの提示と引き換えに、公園の地図と簡単な案内が載ったパンフレットをもらえる。多くの場合、“Do you need a map?”といった風に聞かれる。これは何度も入退場を繰り返す人が多いからと思われる。さらに、日本人であることが分かると日本語のパンフレットがもらえることもある。特にイエローストーンのような日本人観光客の多い公園には日本語パンフレットが用意されている。さらに、公園内の安全のための規則、ビジターセンター、釣り、キャンプ等、公園内の様々な紹介を行っているタブロイド版の新聞がもらえることも多い。この新聞は定期的に発行されている。これは公園内の情報として大いに役立つ。ゲートを管理しているのはパーク・レンジャーと呼ばれる国家公務員である。レンジャーは制服を着用している。

わが国の国立公園では、入場料といった制度は無い。これはわが国の国立公園が必ずしも公営造物でないことによる。場合によっては私有地であったり、公有地であったりするので、入場料をとるといったことは難しいからであろう。ただ、自然公園美化財団が公園利用者の駐車場利用に際し、協力金を徴収している例はある。これは、美化清掃や施設の維持補修、利用者に対する広報活動の財源として用いられる¹⁷⁾。わが国の場合、明確な入り口がないことと相まって、どこから国立公園なのか明瞭でない。最近では道路に国立公園を

示す標識などが出ている場合が多いが、ただ国立公園の境界はというと、分からないのが現状である。また、レンジャー制度はあるが、レンジャーの制服といったものもなく、人数が少ない関係もあって、国立公園内でレンジャーと会話を交わす例も多くはない。

日米両国における利用者数の多い上位10の国立公園を表にしたのが表2である。わが国における利用者数が一桁も二桁も多い。わが国における利用者数は、都道府県からの報告に基づいて環境庁が集計したものである。地域制をとっているわが国では、居住者がおり、生活道路が多数あるので、利用者数を正確に計るのはきわめて困難であると思われる。その点、多くの国立公園にゲートがあり、レンジャーが常駐している米国では、利用者数は実態をかなりよく反映していると思われる。

【道路・駐車場】米国の国立公園内を車で走っていて直ぐに気が付くのはきわめて道路の整備が行き届いている点である。わが国の場合には、地域制ということもあって、国立公園内の専用道路といったものは特に整備されていない。イエローストーンを例にとると、ゲートが東・北東・西・南・北の5カ所に設けられている。公園内には8の字を描くように道路網が作られている。公園内の道路の総延長は、500キロ以上にのぼる。また、キャニオンランズの場合には、南と北に二カ所のゲートがある。特に公園内の南に位置するニード

ルズ・ビジターセンターに行くには、主要一般道の191号線から西に約70キロ程入らなければならない。その間は国立公園内ではないのだが、ギリシャ神殿を思わせるような自然の造形には圧倒される。もちろん、家一軒、店一軒あるわけではない。このように米国の国立公園の場合には、車でしか行きようのないところが多く、そのための道路整備が進んでいる。国立公園内の制限速度は、ビレッジと呼ばれるホテル、マーケット、郵便局等の集合施設の近くを除いて、一般に時速35～45マイル（約56～72キロ）である。日本における一般道の制限速度から考えるとかなり速いと思われる。ただ米国の場合、一般道の制限速度でも居住地区を除いて55マイル（約88キロ）以上のところが多く、それ程速いとは感じない。道路を走っていると、View Pointというサインが出てくる。そこは、自然の景観をながめるのに良く、また写真におさめるにも絶好のポイントである。駐車場も完備され、それらのポイントを回っていけば、国立公園内の景観を楽しむことができるようになっている。また、ザイオン国立公園のように、道路の色が茶褐色に塗られ、まわりの景観とマッチするように工夫されているところもある。

米国の国立公園内の道路は、片側1車線の2車線であるが、わが国のように狭い道路はない。わが国の国立公園の山岳道路では、見通しの悪いところにカーブミラーが設置されている。米国の場合には、カーブミラーが設置されているような、ある意味では危険な道路はまずない。また、これらの道路は原則として舗装されている。ただし、キャニオンランズやアーチーズのようにオフロード・ドライブのメッカといわれるようなところには、オフロード専用の道路があり、そこは舗装されていない。また、レッドウッドのトール・ツリー・グロウブで、世界一高いといわれるNugget Treeを見に行くには、特別のゲートを通っていかなければならない¹⁰⁾。ゲートから先は舗装されていない。

わが国の国立公園における道路管理で特徴的なのは、国立公園によっては混雑時にいわゆるマイ

カー規制が行われていることである。上高地や尾瀬等といった国立公園では、利用拠点の一部の地域において、道路、駐車場等の施設容量を上回る車が殺到するようになった。その結果、過剰利用のため自然環境が脅かされる事態にいたった。そこで、1974年に「国立公園における自動車利用適正化要綱」が定められた。この結果、交通規制を中心とした、自動車利用規制がとられるようになってきた。国立公園の早池峰においても、夏期の土日にマイカー規制が行われ、代替バスが運行されている。

(3) 歩道とキャンプ

【トレイル】米国の国立公園では、トレイルと呼ばれる歩道が整備されている。これはわが国で言う登山道とは若干異なる。わが国の登山道はかなり険しく、狭かったり、迷いやすいようなところもある。一般に登山道には道標が設置されているものの、ところによっては文字が消えかかっていたりする場合もある。登山者が頼りとするのは、登山道沿いの木々や岩につけられたペンキとか赤やピンクのリボンやテープである。登山者はそれを目印にし、目的地に行く。これに対して、米国のトレイルの場合、歩行者専用の道路という概念に近いかもしれない。概して道幅は広く、まず道に迷うようなトレイルの作り方はされていない。急峻なところを一気に登るといったのではなく、健康な人ならだれでも登れるように勾配も考えて道が付けられている。したがって、わが国の登山道の概念でトレイルを登っていくと、いささか物足りなさを感じるかもしれない。トレイルヘッドと呼ばれる登山道の入り口には標高や登山道、あるいは心臓の弱い人は登らないようにといった注意事項を盛り込んだ標識が置かれており、至れり尽くせりといった感じがする。

【バックカントリー】トレイルに関連するので、バックカントリーについても触れておこう。バックカントリーとは、日本語では奥地という意味であるが、車では行けず、徒歩あるいは馬等を利用して原生地に入っていくというイメージである。

テントによる露営を伴うバックカントリー・ツアーの場合、公園によっては事前に予約をし、許可が必要な場合もある。これはバックカントリーの利用者数が増え過ぎ、自然環境に悪影響を及ぼすことがないようにするためにとられた措置である。利用者は予約の際、どのようなルートを取り、どこにテントを張るかを登録しなければならない。また、過剰利用を防ぐために、一定の割当制をとっている国立公園もある¹⁹⁾。マウント・レーニア国立公園のビジターセンターで、登山者がバックカントリー・ツアーの予約をしようとしていた例では、レンジャーはコンピュータを操作し、予約状況を確認しながら手続を行っていた。このように米国の場合には、キャンプ地でキャンプをしようにも勝手に行ける訳ではなく、事前の予約が必要である。

わが国の場合、登山自体で予約が必要な例というのは聞いたことがない。山小屋にしても、本来、避難小屋的な性格を有しているので、誰でも宿泊できるというのが原則である。また、キャンプ地も指定はされているが、事前の予約等は必要なく、いわば早い者勝ちといった形で利用されているのが現状である。

(4) 施設の整備

施設面については日米の国立公園で異なる点が多々あるので、ここではいくつか特徴的なことについて記しておきたい。

【施設の集中管理】公園内の主要施設としては、ビジターセンター、それに、食堂、ジェネラル・ストア（小さな商店からスーパーマーケット程まで規模は多様）、ホテル、郵便局などが一体となったビレッジがある。ビジターセンターはかならずあるが、ビレッジの施設はある程度入場者数の多い国立公園に限られる。やはり、グランドキャニオン、ヨセミテ、イエローストーンといった年間利用者数が300万人を超えるような公園の場合には、施設も整備されている。逆に、利用者数が少ない公園ではこういった施設は設置されていない。米国の国立公園においてこれらの施設を運営する

にはコンセプションと呼ばれる許可が必要である。国立公園内では勝手に営業できない²⁰⁾。わが国の場合には、国立公園内にも私有地がある関係で米国のように集中的な管理を行うことはできない。国立公園内においても特別地域外であれば、ホテル、食堂、おみやげ物屋といった工作物を設けることができる。

【ビジターセンター】米国のビジターセンターは大変よく整備され、さまざまな機能を提供している。まず、トイレがおかれている。これは公園に着くまで、かなり長距離を何も無いところを運転してこなければならない場合が多いことを考えるときわめて重要である。次に、公園に関するインフォメーション・ブースがおかれ、レンジャーが常駐している。レンジャーと利用者は気軽に会話をしている。また、ここでは、公園内の行事の情報が提供されたり、レンジャー引率によるツアー（有料の場合もあれば、無料のこともある）のチケットも入手できる。ブースの近くには公園に関連する書籍、地図、資料、絵はがき、ビデオ等が販売されているコーナーがある。ビジターセンターによっては、公園内の模型や写真が展示されたり、公園のビデオが放映されたり、あるいはレクチャー・ルームが用意されているところもある。前述したが、バックカントリーのテント泊の予約等もビジターセンターで行うことができる。

わが国の場合にも国立公園にはビジターセンター（正式には、「博物展示施設」）がおかれている²¹⁾。自然公園を訪れる利用者に対し、その公園の自然および人文に関する展示解説をすると共に、使用指導や案内を行っている。ただ全般に活気が無い印象を受ける。最近、たとえば知床国立公園では、ビジターセンターとは別に自然トピアしれとこ管理財団が管理する「知床自然センター」が設置されている。インフォメーションはもとより、喫茶・レストランや売店もおかれ、知床の自然を映像で楽しむことができるダイナビジョンが売り物になっている。ただし、インフォメーションとはいっても、専門家が配置されているわけではないようである。

【ゴミ】トイレとゴミは自然環境を保全する上において今や世界中どこでも問題になっており、人が集まるところでは避けて通れない問題である。まず、ゴミに関してであるが、わが国の国立公園では「ゴミ持ち帰り運動」を行っている。ゴミは利用者に持ち帰ってもらい、各自で処分してもらうことになっている。これに対して、米国の国立公園内においては、人がゴミを捨てそうなところには至る所にゴミ箱が設置してある。ゴミ箱はビレッジやビジターセンターに限らず、トレイル・ヘッド（日本でいえば登山口）の駐車場やビュー・ポイントの駐車場にも設置してある。その意味ではゴミを捨てるのに困るといったことはまず考えられない。ゴミは燃えるゴミ、不燃ゴミ、ビン・カンの類に分類して大きなゴミ箱に捨てることになっている。また、野生生物が出没するようなところでは、野生生物にゴミを食い荒らされないように、きちんとしたふたが付いており、容易にゴミ箱が開けられないようになっている。おそらく、指定のゴミ処理業者なりがゴミ箱のゴミを頻繁に回収しているのではないと思われる。米国の国立公園の場合には有料だからこそうしたサービスを提供できるのであろう。

【トイレ】次にトイレについてであるが、これもまた米国の国立公園では、よく整備されている。水洗トイレの設置が可能なところには水洗トイレが設置され、不可能な場合には、濃いブルーの薬品を入れた簡易トイレが設置されている。これは汚物をそのままためる形式のトイレであるが、臭いが気になるということもない。レッドウッドのトール・ツリー・グロウヴについては先述したが、それを例にしてトイレの整備状況について説明しておこう。レッドウッド内には主要なところにはトイレが整備されている。さらに、トール・ツリー・グロウヴ地域にもトイレが整備されている。まず組み合わせ式の鍵がかかっているゲートから未舗装道路を15分程走ると駐車場に着く。そこには簡易トイレが二つ設置されている。そこからは徒歩で一番高い木（Nugget Tree）まで行くことになる。徒歩で30～40分程かかる。その中間とおぼし

き地点のトレイル脇に簡易トイレがひとつ設置されている。

わが国の国立公園におけるトイレ事情はきわめてお粗末な点がある。たとえば、霧島屋久国立公園の人気スポットといえは縄文杉ツアーである。この縄文杉を見に行く人は、上屋久町商工会の推定で年間3万人といわれている²⁰⁾。この縄文杉までは荒川登山口からトロッコ道を行き、大株歩道に入るといのが一般的なコースである。荒川登山口にはトイレが設置されているが、縄文杉までまったくトイレがない。片道、約4時間はかかると思われる。また、縄文杉からさらに5分程歩くと高塚小屋がある。そこが縄文杉に一番近いトイレということなる。しかし、縄文杉からさらに歩かなければならないことと、高塚小屋のトイレがきわめて劣悪であるため、高塚小屋のトイレまで来る人はそう多くないように見受けられた。ここまで縄文杉ツアーがポピュラーになってしまった以上、早急にトイレの対策をとる必要があるだろう²¹⁾。

なお、日米の国立公園について、制度と公園内の管理を整理したのが表3である。

3 国立公園における米国人と

日本人の行動パターン

3-1 個と集団

国立公園における米国人と日本人の行動パターンを見た場合、まず大きな特徴として米国人は個人、夫婦、家族、小グループといった少人数で国立公園を利用しているように思われる。これは多くの国立公園の交通手段としてもともと自動車等しか想定されていないことによると思われる。キャンピングカーで国立公園を移動している人も数多くみられる。国立公園内あるいは隣接地にはキャンピングカー用の施設も用意されている。このようなキャンピングカーを利用する人の多くはすでにリタイアした人が多い。入場料のところでも明らかにしたように、米国では62歳以上の人は、わ

表3 日米国立公園の比較

	米 国	日 本
1 制度上の違い		
土地所有の形態	国有地	地域制（土地所有に関係なし）
国立公園の創設	法律による	環境庁長官の指定
最初の国立公園	1872年（イエローストーン）	1934年（瀬戸内海、雲仙天草、霧島屋久など）
対 象	原始的大自然：例外－メサベルデ 国立公園（アサジ）	既存の観光地－日光、富士箱根 原始的自然環境－大雪山、中部山岳地域
2 公園内の管理の違い		
管理全般 管理者 管理事項	内務省国立公園局 公園内のすべての事項	環境庁＋その他 個々の管理権ごと
入り口と道路 ゲート 入場料 道路・駐車場	あり（多くの国立公園） 有料（無料の場合あり） 整備良好（車の通行あたりまえ）	なし 無料（駐車場の協力金） 整備不十分（マイカー規制）
歩道とキャンプ トレイル バックカントリー	整備（勾配、地図、標識） 事前の予約制、割当制	登山道 制限無し
施設 施設の管理方式 ビジターセンター ゴ ミ トイレ	集中（ビレッジ） 公園内の拠点、各種サービス ゴミ箱の設置 十分設置、清潔	無秩序 サービス不十分、活気がない ゴミ箱無し（ゴミ持ち帰り運動） 不足、きたない、臭い

ずか10ドルで全米の国立公園等を利用できるゴールデン・エイジ・パスポートを購入できる。このパスポートは一度購入すれば、一生有効である。キャンピングカーであればホテル代も必要なく、ペットの同伴にも支障がない。そこで、時間的に余裕があり、お金もかからないキャンピングカーでの国立公園巡りは、まさにリタイアした米国人にとってはひとつの楽しみなのかもしれない。

翻って日本の場合、国立公園の利用状況はどうかであろうか。日本の国立公園はもともと景勝や温泉で有名な観光地であることを考えると、どうしても団体での利用が主流であると思われる。問題なのはこの団体による利用のパターンがこれまで個人による利用が主であったところにも及んでいることである。屋久島を例にとって説明してみよう。

屋久島のメインの観光といえば縄文杉見物と宮之浦岳登山であろう。縄文杉に登る一般的な登山口は荒川口である。宮之浦岳に登る登山口は花之江河である。いずれの登山口も駐車場とは呼べないようなスペースしかないが、そこまで大型バス

が入ってくる。一台の大型バスにおそらく50人近い人が乗っていると思われる。2台であれば100人位の人が一度に登山をすることになる。私が縄文杉の帰りに一緒になった70歳の男性の例では、前日に宮之浦岳に登り、その日が縄文杉登山ということであった。これは地元の人が皮肉を込めて「巡礼」と呼ぶ宮之浦岳・縄文杉バックツアーである。おそらく朝4時位には皆起きてバスに乗り、連日、登山口までやってきたものと思われる。このようなツアーでは個々人の健康管理にも問題がある。これらのコースはいずれも10時間近い歩行を強いられるからである。参加者は帰りの道で、ただただバスに乗り遅れないようにと、中には走っている人もいる有様であった。これでは世界遺産にも登録されている屋久島に何のために来たのかまったく分からない。さらにこのツアーは大手観光資本によって、ホテル、バス、高速艇、おみやげ物屋にいたるまですべてがセットされている²⁴⁾。交通機関の問題もあり、一概に米国と日本でどちらが良いとか悪いとかは言えないが、考えさせられる光景であった。

3-2 静寂と喧噪

あの騒々しい米国人が、と言ったら米国人に失礼かもしれないが、なぜか国立公園では皆もの静かである。グランドティトンではじっと双眼鏡をのぞいていたり、イエローストーンではわき上がる温泉の湯気を眺めていたりする。また、ヨセミテ国立公園では乗馬でトレイルを進むグループにも出会った。言葉を発するでもなく、ただ馬のひずめの音が響いてくるだけだった。米国人は、たとえば人から贈り物をもらったときなど、素直に感情を表現する。われわれから見ればいささかオーバーアクションに思えてしまう。そんな米国人が大自然のスペクタクルに遭遇したとき、ただただじっと言葉もなく眺めているという姿は印象的であった。わが国の国立公園の場合には静かに景観を楽しむといった習慣はあまりないのかもしれない。神聖な場所は同時に祝いの場に転ずることも多い。花見酒といったように自然を愛でながら酒を飲むといった習慣は米国人にはないように思われる。

キャニオンランズ国立公園の外に位置するが、コロラド川とグリーン川が合流するデッド・ホース・ポイントがキャニオンランズに負けず劣らず人気が高い景勝地である。州立公園に指定されている。たまたま2〜3人の日本人女性のグループと展望デッキで一緒になった。日本語なのでストレートに耳に入ってきたという理由もあるかもしれないが、その騒々しさには閉口した覚えがある。何もこれほどすばらし景色を前にして、誰が写真に入るとか大声で話すことではないと思ってしまった。また、縄文杉前の展望デッキで大勢の人がお弁当をひろげているのに驚いたこともある。中にはコンロでお湯を沸かしたり、携帯電話で縄文杉の前にいることを誇らしげに友人に話す人もいる。都会の公園の喧噪がそのまま縄文杉の前で繰り広げられているように思われた。

これはもちろん米国人が良くて、日本人がだめだなどと言っているのではない。おそらくこれも米国人なり、日本人なりの自然の素直な受け止め

方なのだろう。ある意味で自然と日本人との距離の近さを示す例なのではないかとも思える。

3-3 「見るもの・造るもの」と

「利用するもの」

さらに別の点からとらえてみると、米国人は国立公園を「見るもの」ととらえているようにも思われる。つまり、そこは日本人の感覚から言うと、何となくとてつもなく巨大な「箱庭」のように思えてしまう。したがって、「箱庭」を管理する人々はどのようにしたら立派な箱庭になるか腐心することになる。たとえばイエローストーンには多くのバッファローがいる。これはすべて野生種と家畜種との雑種であり、純粋の野生種ではない。また同じくイエローストーンの例だが、ここでは1930年代に狼は絶滅してしまった。そこで、カナダで捕獲された狼をイエローストーン公園内に放つという試みが1995年から行われている。これは失われてしまった生態系を復元することが目的である。このように人為的に自然を復元しようとする試みが米国では積極的に行われている。

これに対して、わが国の場合、国立公園とはいってもどこからが国立公園なのかが明瞭でない。また山に関する規制計画で、特別地域（1種・2種・3種）、特別保護地区、普通地域といった区分を知っている人はほとんどいないであろう。したがって、国立公園内でも山菜とりとかキノコ狩りといったことを多くの人が楽しんでいる。とはいえ、高山植物をとってはいけないとか、木を切ってはいけないということは誰もが知っている。もともとわが国では、入会といったように一定の地域住民が山の恩恵を受けることができた慣習があった。また、小学生や中学生のときに遠足で国立公園内の山に登り、木にからみついている蔓でターザンごっこをしたり、落ちているドングリを拾ったという経験は多くの人を持っているだろう。日本人にとって国立公園とはいっても特別なところではない。入場料が必要なわけでもないし、昔からそこに存在した見慣れた自然なのである。それが日

本人の自然観なのかもしれない。

4 自然観と国際環境政策

4-1 米国人の自然観と国際環境政策

これまで日米両国の国立公園制度の違いを概観し、両国国民の国立公園における行動パターンを分析してきた。米国と日本の国立公園制度はその成り立ちからして異なるので、両者を同じ土俵で論ずることはできない。それでもそのような違いや現在における管理の仕方の根本的な違いには、それぞれの国民の自然に対する考え方の違いが反映されているのではないと思われる。米国の場合、制度としての国立公園は他の国が模範とすべき内容を確立してきている。また、市民の国立公園における態度というものも大変秩序あるもののように思われた。しかし、何かがおかしいのである。あまりにも整然と整備された道路やトレイル。しかし、またまた整備されたトイレ。あまりにも秩序が保たれ過ぎているのである。人間が入り込むことができるところとそうでない地域との区別があまりにも明瞭すぎるのである。

そこには、人間が一定のルールを作り、そして入り込めるところはきちんと整備し、そうやっていわば原生自然を保とうとする自然観が垣間見られてしょうがない。原生自然を守っているのは人間なのだという、いわば一種の自然に対する人間の優越性があまりにも際立っているような気がしてならない。自然というものは人間があたかも操作可能であるかのように考えているのである。その方法として用いられているのが制度である。制度による操作可能な自然という考えは、おそらく米国人（この場合は、西欧的伝統を有する白人と限定してもよいかもしれないが）の有する自然観を代表しているように思われる。

さらに困惑を覚えるのは、米国には会員が何百万人という大きな自然保護団体がいくつか存在し、あるいはジョン・ミューアに代表されるいわば自然保護の伝統がかなり深く根付いていると考えら

れているにも係わらず、どうも国際社会における米国の環境政策にはこれらの精神が反映されていないのではないかという点である。何かそこには理念的・思弁的な自然保護の思想が垣間見え、いわば土地にもともと根付いてきた自然保護の思想が見られない。比較的最近になってインディアンが有していた自然のとらえ方、自然を大切にする思想が説かれるようになってきている。しかし、先住民が住んでいた土地から、人々を追出し、開拓を進め、わずか二百数十年の間に、今日、米国の支配的階層になってきた人々の歴史を考えると、なおさら自然保護を米国の支配的階層が唱えることに空しさを感じざるを得ない。

国際社会における米国の環境政策の一例を挙げよう。現在、もっとも深刻かつ緊急の対応を要する地球環境問題として、最初にも述べたように、いわゆる地球温暖化がある。この地球温暖化は1992年の気候変動枠組み条約、そして1997年の京都議定書を経て、国際的な取り組みのいわば枠組みができあがっている。しかし、この条約の交渉を通して、これらの条約に一貫して消極的な態度をとり続けてきたのが米国であった。米国は京都議定書においては、排出取引という制度を提案し、それを認めさせた経緯がある。この排出取引とは、一定の年限を区切って、各国（先進国だけが）に排出の枠を設定し、もし決められた排出枠以上に温室効果ガスを削減できたなら、他国にそれを売却でき、逆に排出枠を超えて排出しなければならない国は超過分を他国から買えばよい、というものである。そこではあたかも人間が排出してよい温室効果ガスの量がすでに決まっているような観がある。しかし、実はそれ自体、科学的論議の対象なのであり、科学者・NGO関係者によれば、現在の京都議定書に規定されている削減量ではとても地球の温暖化に対処できるものではないというのが一致した見方である²⁹⁾。しかし、米国は一定の制度（この場合は、排出取引）を作ることによって、あたかも自然（この場合には、人為的な影響による地球の温暖化）を操作できるかのように行動しているように思われる。また、

そこでは、自然と人間の厳格な峻別化が行われているような気がしてならない。

米国人が特に自然を人間の都合のいいように造り替えることができるという考えを持つようにいった背景には次のような一般的理由と米国特有の理由があったのではないと思われる。ただ、ここで米国人とは誰かを確定しておく必要がある。米国は周知のごとく移民の国であり、先住民であるいわゆるアメリカ・インディアンがおり、また、強制的に米国に連れてこられたアフリカ系アメリカ人（黒人）もいる。しかし、米国を支配しているのは一般にワスパ（WASP-White Anglo-Saxon Protestant）と呼ばれる人々である。ワスパは、宗教的にはプロテスタントであり、出身がイギリス（アングロサクソン）という中流および上流層の白人を指す言葉として用いられてきている²⁹。したがって、ここではこのワスパを中心にその自然観を検討することにする。

一般的理由として、自然に対する人間の優位を特徴づけたキリスト教があったことは否めない。キリスト教によれば、人間は神によって造られた。旧約聖書の創世記を思い起こしてみよう。神はすべてのものを造り上げ、最後に人間を造った後、次のように述べた。「ふえかつ増して地に満ちよ。また地を従えよ。海の魚と、天の鳥と、地に動くすべての生物を支配せよ」³⁰。神は人間に自然に対する支配権を与えたわけである。こういった自然に対する考え方が子どもの頃から繰り返し教え込まれてきた。このことについて、村上陽一郎は、自然を観察する主体としての人間と観察される対象としての自然を切り離すだけでなく、人間のみが自然界の主人であるという「人本主義」の思想を生み出し、さらに自然界から人間的な要素を追放するという「非擬人主義」の傾向をも生んだ、と分析している³¹。そこでは、唯一神→絶対神の姿に似せて創造された人間→人間以外の創造物という上下関係を示す図式が提示されているわけである³²。人と自然物との二元論的峻別が行われたわけである³³。

それと同時に、自然界から人間的要素を追放す

る「非擬人主義」をさらに増幅させる理由となったのは、1776年のアメリカ建国以降における、西部開拓の歴史である。西部開拓においては、原野を切り開き、農場や牧場に変え、鉄道を建設していった。自然は常に人間の手によって変えられるという考えの背景には、この西部開拓という経験があった。鬼頭秀一は、米国人にとっての原生自然は、「道徳的にも反キリスト教的な無秩序なもので、人間によって秩序づけられるものであったし、開拓者の生活としても、絶え間ない脅威となり乗り越えられるべき障壁として存在していた。むしろ、征服し、管理されるべきものとして考えられていたのである」³⁴と指摘している。

アメリカ建国以来の短い歴史はまさに自然と文明の正面衝突の歴史であった。自然と文明との共存はあり得ず、食うか食われるかの関係にあったわけである。米国人が大自然を前にしたときに、普段考える米国人とは違った印象を受けるのは、大自然のまっただ中におかれたときに、人間も所詮多くの生き物のひとつに過ぎないことを本能的に察知するからではなかろうか。いわば失われた過去の記憶が突然呼び覚まされるのかもしれない。また、このような自然と文明との調和を経験したことのない自然観が、地球温暖化防止に関する国際的な取り決め交渉においても、顔を出してくるのではなかろうか。

4-2 日本人の自然観と国際環境政策

翻って日本人の場合はどうであろうか。日本にはもともと自然と人間とは一体とする思想があった。だからこそ、山、川、草、木などありとあらゆるものに神が宿るとして崇拝してきたのである。今西錦司は、「自然の体系に編入されている人間」という考えを提示している³⁵。おそらく、西欧流の考えでは、人間は自然の体系に編入されていない、ということになるのだろうか。もちろん、とくに昭和30年代以降の高度経済成長期における過剰開発はさまざまな公害を生み、国土を荒廃させた大きな原因となってきたことは記憶に新しい。

日本人がもともと有していた思想は、自然はけっして人間が操作できるものではなく、人間は自然によって生かされているという思想なのではないだろうか。だからこそ、山からの恩恵に感謝を捧げ、山の神にお供え物をするため祠を作り、そこに定期的にお参りするといった風習が生まれたのである。その一例として屋久島を取り上げてみたい。屋久島には岳参り(タケメエ)という山岳信仰がある。岳参りについては、屋久島出身の文化人類学者、中島成久の『屋久島の環境民俗学』を参考にしながら話を進めていく³³⁾。現在でも岳参りは行われ、またその一部は6月のシャクナゲ登山として広く行われている。岳参りは、屋久島の各集落で、春と秋の二回(あるいはそのいずれか一回)、決められた日取りに村の青年が参詣登山をするというものである。屋久島には海岸からずっとそびえ立つ1,000メートル内外の山々がまざある。これを前岳という。そこを越え、さらに屋久島の中心地、宮之浦岳などの奥岳にお参りする。その際、浜の砂を竹筒に詰めて山に持っていった。奥岳で参拝を終え、シャクナゲの枝を折って、各家庭に配った。このシャクナゲは山の神の依代、つまり山の神が乗り移ったものと考えられる。中島によれば、「岳参りとは、里における豊穡を山の神に祈願するだけでなく、山の神を里に降ろし、その霊によって里の安寧を図る」という考えに基づいているという³⁴⁾。そこには、海辺の砂を山に捧げ、また山の神を海にもたらすという、いわば海と山との交流を通した、自然への感謝の気持ちが込められている風習である。

おそらく、このような風習は各地に残っているのではないと思われる。その何よりの証拠として、日本の山に登ると必ずといっていいほど、祠が祭られている。この夏、青森の岩木山に登ったとき、その頂上には神社の社まであり、神主さんもいらした。それは、ただ単に自然を保護しようといった発想から生まれたのではない。人間も自然の一部なのであることを自覚し、ある意味で人間の上位にある自然というものに対する素直な崇敬の念の顕れなのではないだろうか。

しかし、このような自然との一体感をもった自然観を有する日本人が、京都議定書をめぐる交渉において、米国と同じように消極的な態度をとったのは何故なのであろうか。一般論として、わが国において自然破壊を糾弾する思想が育ってこなかった理由として、間瀬啓允は、「自然と一体化することを理想とし、花鳥風月を愛でるという感情的な、あるいは宗教的な自然理解が、かえってそれを育てることを拒んできたからではなかったのか」³⁵⁾と述べている。また、「日本人の自然愛といい、アニミズム、パンセイズムといい、実はそれらは漠とした、自然に対する感性的な反応でしかなかったのだ」³⁶⁾とも指摘する。梅原猛は、日本人の自然愛がかえって自然に対する甘えを助長し、ついには自然破壊にまでいたらせたのではないのか、といったことを述べている³⁷⁾。この自然に対する「感性的な反応」や「甘え」という指摘は重要であると思われる。つまり、このような自然に対する感性的な反応や甘えによって、自然環境破壊の問題を真正面からわれわれの現実の問題としてとらえ、それに対する具体的な対応を考えるという思考回路が奪われてしまっているような気がする³⁸⁾。

もう少しこの問題を掘り下げて考えてみたい。日本人の自然観を感性的なものととらえ、自然に対する甘えを有する場合、私はそこに自然破壊に対する二重の意味の問題点が浮かび上がるのではないかと考えている。ひとつは、自然に対する感性自身が失われ、自然の移ろいに鈍感になってしまう危険性である。これはもちろん、わが国の近代化、とりわけ昭和30年代以降の高度経済成長期に顕著になってきたものである。今やわれわれの身近では、土の上を歩くということすら日常生活の中でまれになってきている。このような感性の喪失自体が、自然の変化をとらえることができず、まさに人工的世界、あるいは人工的自然を当然と考える思想を生み出してきているのではないか。このような日本人の感性的自然観はもう一方では自然に対する甘えを助長してきた面がある。西欧流の言葉で表現すれば、自然の持つ収容力を無限

なものにとらえてきた訳である。しかし、ここにおける問題点は、この甘え故に、自然を客観化できず、自然を事実としてとらえ、その変化を科学的に解明する視点が欠けているということである。こういった自然観が、京都議定書の交渉において消極的な態度をとり続けた背景にあったのではなかろうか。

日本でも、とりわけ高度経済成長期以降は、米国と同じような自然観を持つ人々が増えてきているように思われる。しかし、自然と文明との比較的調和のとれた共存の時代の記憶を有する人はたくさんいる³⁹⁾。また、高度経済成長への反省から、自然環境を再び尊重する方向へと少しずつ回帰してきているように思われる。その点、そのような記憶の薄弱な米国においては、自然観の変更を迫るのは容易でないと思われ、それが今後の国際環境政策にも大きな影響を及ぼすような気がする。

注

- 1) 京都議定書交渉に関しては、竹内敬二『地球温暖化の政治学』朝日新聞社、1998年、太田宏「地球温暖化をめぐる国際政治」信夫隆司(編)『環境と開発の国際政治』南窓社、1999年、98-128頁、田邊敏明『地球温暖化と環境外交－京都会議の攻防とその後の展開』時事通信社、1999年等を参照。また、京都議定書の内容については、岩間徹「地球温暖化と国際法」信夫(編)『環境と開発の国際政治』、129-157頁参照。
- 2) この点について、示唆に富むのは、今西錦司である。今西錦司『今西錦司全集』(増補版)第9巻、講談社、1994年所収の「私の自然観」29-51頁参照。
- 3) 詳しくは、加藤則芳『森の聖者——自然保護の父ジョン・ミューア』山と溪谷社、1999年参照。
- 4) National Geographic Society, *National Geographic's Guide to the National Parks of the United States* (Washington, D. C.: National Geographic Society, 1997) で用いられている分類を一部改変した。
- 5) 自然保護年鑑編集委員会(編)『自然保護年鑑4(1995・1996年版)』日正社、1996年、46頁。
- 6) 自然保護年鑑編集委員会(編)『自然保護年鑑4(1995・1996年版)』、38頁、山村恒年『自然保護の法と戦略』(第2版)、有斐閣、1994年、100-103頁参照。
- 7) 国家保存物は場合によっては国定公園と訳されることもある。たとえば、「地球の歩き方」編集室『地球の歩き方49アメリカ国立公園1999-2000年版』

- ダイヤモンド社、1999年では、National Monumentに国定公園という訳語があてられているが、これは日本の国定公園とは異なる。
- 8) この法律は、正式には、An Act to set apart a certain tract of land lying near the headwaters of the Yellowstone River as a public parkという。詳しくは、Lary M. Dilsaver (ed.), *America's National Park System: The Critical Documents* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 1994), pp. 28-29参照。
 - 9) Dilsaver(ed.), *America's National Park System*, pp. 7-8参照。
 - 10) 詳しくは、岡田泰男『フロンティアと開拓者——アメリカ西漸運動の研究』東京大学出版会、1994年、11-33頁参照。
 - 11) 詳しくは、加藤『森の聖者』、207-214頁参照。
 - 12) 地域制に関して参考になる文献として、池ノ上容「地域制国立公園制度の検証」(前編)『国立公園』544号(1996年6月)、2-8頁。
 - 13) 自然保護年鑑編集委員会(編)『自然保護年鑑4(1995・1996年版)』、46-47頁参照。
 - 14) 山村『自然保護の法と戦略』(第2版)、116-121頁参照。
 - 15) 米国国立公園におけるサイン一般については、国立公園協会(編)『自然公園の施設—サイン計画／アメリカ西部地域の国立公園概論—』国立公園協会、1992年参照。
 - 16) 入場料に関して詳しくは、http://www.nps.gov/pub_aff/entfee.htmを参照。
 - 17) 自然保護年鑑編集委員会(編)『自然保護年鑑4(1995・1996年版)』、84頁。
 - 18) このゲートには組み合わせ式の鍵がかかっている。鍵の組み合わせの番号は毎日変更される。Nugget Treeを見たい人は、ビジターセンターで自分の車を登録し、許可を得る必要がある。その際、鍵の組み合わせの番号も教えてくれるので、自分で鍵を開けて入ることになる。
 - 19) バックカントリーの許可と割当制については、加藤峰夫「公園利用者数の「調整」は可能か? Overnightの利用に対するBackcountry Permitsの“Quota System”(割当制)と、Day Useをも対象としたアーチーズ国立公園の“VERP”管理の試み」『国立公園』546号(1996年9月)、12-18頁参照。
 - 20) コンセッション制度については、加藤峰夫「アメリカ国立公園におけるコンセッション(特許会社)制度改革の動き」『国立公園』532号(1995年4月)14-18頁参照。
 - 21) わが国のビジターセンターについては、国立公園協会(編)『自然公園の施設—自然解説とビジター・センター』国立公園協会、1994年参照。
 - 22) 上屋久町商工課は、1999年のゴールデンウィーク期間の縄文杉登山者数をカウントしている。それ

- によると、4月24日94人、25日88人、27日37人、29日170人、30日219人、5月1日348人、2日412人、3日681人、4日245人、5日171人となっている。資料は上屋久町商工会の提供による。
- 23) この問題に関しては、現在、環境庁や鹿児島県など関係行政機関で構成されている「屋久島山岳部利用対策協議会」で仮設トイレを設置することが具体的に検討されている。『屋久島通信』（屋久島環境文化財団）13号、1999年12月、5頁参照。
- 24) この話は屋久島で民宿を営んでいる人やその他の地元の人々から聞いた。同じような指摘は、中島成久『屋久島の環境民俗学』明石書店、1998年、211頁にもある。
- 25) 松岡譲「気候安定化からみた数値目標の妥当性」『環境研究』110号（1998年7月）、27-30頁。
- 26) 越智道雄『ワсп(WASP)』中公新書、1998年、10頁。
- 27) 関根正雄（訳）『旧約聖書創世記』岩波文庫、1967年、11頁。
- 28) 村上陽一郎『近代科学を超えて』講談社学術文庫、1986年、137頁。
- 29) 金子廣行『キリスト教と環境破壊』文芸社、1999年、100頁。
- 30) 里見軍之・谷口文章（編著）『現代哲学の潮流－哲学と生活世界の展開』ミネルヴァ書房、1996年、142-143頁参照。
- 31) 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす－環境倫理とネットワーク』ちくま新書、1996年、41-42頁。
- 32) 今西『今西錦司全集』（増補版）第9巻、46頁。
- 33) 中島『屋久島の環境民俗学』、97-116頁。
- 34) 中島『屋久島の環境民俗学』、99頁。
- 35) 間瀬啓允『エコロジーと宗教』岩波書店、1996年、16頁。
- 36) 間瀬『エコロジーと宗教』、18頁。
- 37) 梅原猛『哲学の復興』講談社現代新書、1972年、201-202頁。
- 38) 間瀬『エコロジーと宗教』、19頁。
- 39) 今西『今西錦司全集』（増補版）第9巻、49頁。

(2000年2月28日受理)

Views about Nature and International Environmental Policy

Takashi Shinobu

Summary This article analyzed differences between the national park systems of Japan and the U.S., and compared the patterns of action in the American with those in the Japanese with respect to national parks. Differences in views about nature that Japanese and American citizens hold have been clarified through this analysis. Americans express a view of nature where nature is managed. Japanese cite an ambiguous sense of togetherness between nature and human beings. Results have proved how these differences in views of nature for both groups may have influenced the results of the Kyoto Protocol.

Key Words National Parks, views about nature, international environmental policy, global warming, Kyoto Protocol